

日欧の文化水準を比較する。

約二七十年に亘る江戸時代は、戦乱もなく、世界的に見ても稀にみる平和な時代が続きました。しかも、鎖国という環境のなかで、まさに自給自足で国民を養った時代でもありました。この間にわが国の文化は、独自の発展を遂げたことを数々の例証が示しています。

しかし、明治以降こんにちまで、わが国は西欧列強諸国に範を採る余り、それまで育んできた自分たちの文化とその水準を、歴史の彼方に置き去りにしてきてしまったのです。

今年、「江戸開府四百年」という節目にあたり、あらためて「江戸時代」を見直す動きが活発です。今号は「巨大都市江戸が和食をつつた」などの著書で知られる渡辺善次郎さんに、江戸時代のわが国と西欧諸国の文明・文化水準の比較を試みていただきました。



渡辺善次郎（わたなべ ぜんじろう）

一九三二年 東京に生れる。一九五六年早稲田大学卒業。
一九六二年 同大学院商学研究科博士課程修了。同年国立国会図書館に入り、調査立法考査局農林課長、海外事情課長を経て、専門調査員。
一九九一年 三戸退職。商学博士。現在、都市農村関係史研究所主宰。
主著：都市と農村の間―都市近郊農業史論―（一九八三年 論創社）、「聞き書・東京の食事」(編著、一九八七年 農文協)、巨大都市江戸が和食をつつた(一九八八年 農文協)、「農のあるまちづくり」(編著、一九八九年 学陽書房)、「東京に農地があつてなぜ悪い」(共著、一九九一年 学陽書房)、「近代日本都市近郊農業史」(一九九一年 論創社)。

「江戸—もう一つの文明社会」 —同時代の日本と西洋—

渡辺 善次郎

江戸のイメージ・ギャップ

世界でもっとも有名なグルメガイドといえ、昔からフランスのタイヤ会社ミシュランのガイドブックだが、それが刊行されるはじめたのは一九〇〇年(明治三十三年)からである。だが江戸ではその百年以上前から、市中の料理屋案内が番付の形で出版されている。

江戸は西洋よりもずっと早くから外食文化の発展した都市であった。例えば料理店の出現である。

有名なブリア・サヴァランの『美味礼讃』は、料理店をこう定義づけている。

「料理店主とは、いつでも御馳走が出せる準備をしておいて客を待つのを商売とする人のことで、その御馳走は消費者の求めに応じて一人分ずつ定価で分売できる仕組

みになっている。その店がいわゆるレストランなのだ。」

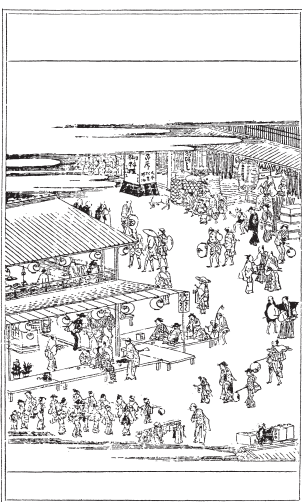
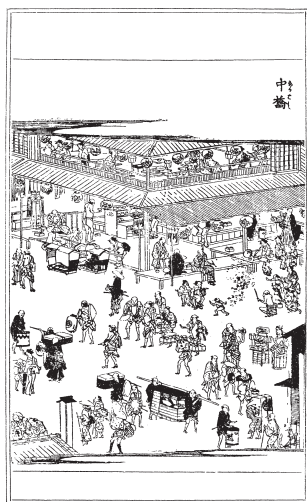
西洋でもっとも古いレストランの登場は、フランスが一七六五年(明和二年)、イギリスでは一八二七年(文政一〇年)といわれる。

これに対し江戸の料理店は一世紀以上も早い一六五七年(明暦三年)に現われている。

やがて、一八世紀も後半になれば「五歩に一樓、十歩に一閣、皆飲食の店ならざるはなし」といわれるほど、高級料亭はじめ各種の飲食店が軒を並べて、江戸は日本随一の食の都とうたわれるようになっていた。

すし、天ぷら、蒲焼など江戸前料理も次々と登場し、江戸っ子たちは初鯉に熱狂、裏店住いの女房たちまで料理茶屋の二階に上って飲み食いする風潮さえ現われた。江戸の食文化についてこんな話をすると、よく次のような質問を受ける。

江戸時代の日本は封建制度の下にあって圧制に苦しみ、不自由で貧しい生活を強いられていたのではないか。「百姓は殺さぬように生かさぬように」とか「ゴマの油と百姓はしほればしほるほど取れる」とかいわ



江戸・中橋 江戸の賑がよくなる。(『江戸名所図會』)

れたように、必死で働いてもみんな年貢で奪われ、いつも食うや食わずの生活を送っていた。そんな時代の中で江戸の食生活はあまりにも豊かで明るすぎるのではないかと。

これでは江戸時代の食と生活とのイメージのギャップが大きすぎる。果して江戸は本当にそんな抑圧された貧しい社会だったのだろうか。食を語るには、まず一般的な生活や社会の状況を見ておかなければならない。

対照的な江戸評価

明治時代の日本の知識人たちは、島崎藤村の『夜明け前』のように、江戸時代を暗黒時代ととらえ、明治になって漸く夜明けを迎えたと考えていたようだ。

当時来日した西洋人たちは、そのことを非常に不思議に感じていた。

『ベルツの日記』はこう記している。「何と不思議なことには、現代の日本人は自分自身の過去については、もう何も知りたくないのです。それどころか教養ある人たちはそれを恥じてさえいます。『いや、

でも日本より大きな国はフランス、スペイン、スウェーデンぐらいで、ドイツは東西統一しても日本より小さい。オランダにいたっては日本の四国ほどの面積にすぎない。しかも江戸時代の日本は世界有数の資源大国であった。

まずもつとも重要な鉱物資源といえば金銀銅鉄であるが、江戸初期の日本は恐らく世界一の金銀産出国で、その産出量は世界の四分の一に達していたとみられている。まさに黄金のジバングである。

銅も世界最大の産出国であった。今でもヴェトナムなどで硬貨を「ドン」と呼んでいるが、これは「銅」のことで、江戸時代に日本から輸入していた銅銭の名残りである。インドネシアやバリ島などでは戦前まで寛永通宝が使われていた。

鉄は砂鉄だが、日本はカナダ、ニュージーランドと並んで世界三大産出国の一つで、その品質の良さと価格の安さで当時ヨーロッパ第一の産鉄国だったイギリスの鉄を問題にできなかったという。

各国とも貨幣は金銀銅を用いていたが、それらをすべて自給していたのは日本だけであった。

また発火用として不可欠だった硫黄も、火山列島日本には豊富で、中国などへの重要な輸出品であった。

エネルギーは主に薪炭であったが、国土の七割が山林におおわれていた日本ではまったく不足の心配はなかった。また水資源は元来山紫水明の国で、まさに「湯水のごとく」といわれるほど豊かな国である。

こうして人口、国土、資源を考えても日本は世界有数の大国であったといえよう。

抜群の農業生産性

当時の主要産業であった農業の土地生産性は西洋諸国をはるかに超えていた。

土地生産性は播種量と収穫量の差で示されるが、西洋の小麦の場合はせいぜい四〜五倍で、フランスでは播いた種の三〜四倍の収穫があれば不作とはいえなかった。

これに対し日本の米はほぼ三〇倍以上の収穫をあげていた。この高い生産力によって三千万という膨大な人口を養い、当初海外からの輸入に頼っていた茶、絹、棉、タバコ、砂糖などをすべて国産化してきた。幕末の棉花の生産性ではアメリカの三〜四倍にも達していたという。

西洋人は日本の農業を見て大きな衝撃を受けた。その一人に幕末にプロシヤ王国の調査団の一員として来日した農学者マロン博士がいる。その『日本農業に関する報告書』（一八六二年）は大要次のように記している。

「日本の農業技術は多毛作と入念な追肥を基礎とした実に合理的な技術体系である。



京都の尿買人。尿と野菜を交換する。（『金草鞋』）

日本はヨーロッパと違って畜産がないから、家畜の腹を通して既肥を作るといふ余計なことをせず、直接人尿尿を肥料として農地に還元し、ヨーロッパ諸国のように人間排泄物を川や海に流して環境を汚染したり、貴重な肥料成分を無駄にしたりという馬鹿げたことはしない。日本の農民は輪作や休閑を知らず、田畑とも年に何回も作物を多毛作し、一作ごとに肥料を施す追肥方式を採用している。ヨーロッパでは休閑や飼料作物の入った輪作方式が一般的で、しかも輪作の一回転に一回既肥を施用する基肥方式だから、土壌の生産性が日本の足許にも及ばない。ヨーロッパの農業技術はみせかけだけの偽りの技術であり、日本の真実

の循環が見事に完結し、数千年にわたって地方の減耗はまったくみられない。」

マロンは人尿尿ばかりでなく、あらゆる廃棄物を肥料化する日本農業の「自然諸力の完全な循環」ぶりに驚嘆した。自分たちはこれまで欧米人がもつとも文明的で、その農業が最高だと信じこんでいたが、日本の農業を見て「深い羞恥の念」にかられるをえなかったと述べている。

西洋の農村・日本の農村

生産力の差は農村の状態に反映する。

一八世紀のフランスでは農地の四分の三は貴族、僧院、ブルジョアの所有で、大部分の農民が保有していた農地はせいぜい一ヘクタール未満であった。これではとてもまともな生活は成り立たない。

その頃フランスを旅したイギリスの農学

者アーサー・ヤングはこう語っている。

「この地方一帯は農業に適しているのに耕作方法がまったくひどい。小麦は雑草と入りまじって見すばらしく黄ばんでいる。農業は貧弱で住民は惨めだ。農村では誰れも靴や靴下をはいていない。それらもうぜいたく品だ。子供たちはなまじこんなボロを身にまとうくらいなら何も着ていない方がましなほどひどい身なりをしている。」



地主の土地の収穫風景。（ジョン・フランソワーズ・ミレー）

一九世紀末になってもこうした状況は変わらない。

「家はまるで豚小屋だ。一つの窓もなく、ほとんど家具もない。床は残飯、ゴミ、汚れた服などが散乱し、男女、子供、家畜が入りまじって寝る。彼等は燃料の節約以外何も考えない。」そしてこうした状況はイギリスでもドイツでも同様だと、カウツキーは「農業問題」で述べている。

司馬遼太郎との対談で、ドナルド・キーンはこんな話を紹介している。

「江戸時代、日本人はオランダからいろいろ学び、オランダ人というのとはとても良い生活をしていると思っていられない。しかしオランダ人から見たら違う。オランダの農民は夏服も冬服も区別がなく、年中同じものを着ている。だからズボンも汗と油で固くなり、脱いでも立ったままになっていく。もちろん風呂にも入っていない。そんな彼等から見たら、どんなに貧しくても、少なくとも夏と冬の着物の区別があり、毎日風呂を浴びて清潔にしている日本の生活をうらやましく思っただろう。当時の日本の文化水準は、すべての点で欧米よりはるかに上だった。」

西洋では階級の格差がきわめて激しい。食生活にしても飢餓と飽食が隣りあつて存在していた。フランスを訪れたナポリアの大使は「フランスでは人口の九割は飢え死にし、残りの一割は食べすぎて死ぬ」と語っている。

当時のヨーロッパでは何とか三五才まで生きたいというのが庶民の願望だった。慢性的な栄養不足と重労働のため、三五才をすぎればもう体はぼろぼろで、老人の顔になっていったという。

では日本の農村はどうであったか。タウンゼント・ハリスは下田での見聞をこう語っている。

「人々は楽しく暮らしており、食べたいだけ食べ、着物にも困っていない。家屋は清潔で日当りも良く気持がよい。世界のいかなる地方においても労働者の社会で下田より良い生活を送っているところはあるま

い。日本ではこれまで窮乏を表わしている顔を一人も見ることがない。子供たちの顔はみんな満月のように丸々と肥えているし、男女ともすこぶる肉づきが良い。彼等が十分に食べていないと想像することは少しもできない。」

明治のはじめに日本各地を旅した英国女性イザベラ・バードは『日本奥地紀行』で米沢平野の光景を次のように記している。

「米沢平野は、南に繁栄する米沢の町があり、北には湯治客の多い赤湯があり、またたくのエデンの園である。鋤で耕したというより鉛筆で描いたように美しい。米、棉、麻、大豆、茄子、きゅうり、柿、ざくろなどを豊富に栽培している。実り豊かに微笑する大地であり、アジアのアルカデヤ（桃源郷）である。自力で栄えるこの豊沃な大地は、すべてそれを耕している人びとの所有するところのものである。彼らは圧迫のない自由な暮らしをしている。美しさ、勤勉、安楽さに満ちた魅惑的な地域である。どこを見渡しても豊かで美しい農村である。」山間部に入っても田畑は「すばらしくきれいに整頓しており、全くよく耕作されており、風土に適した作物を豊富に産出する。これはどこでも同じである。草ぼうぼうの『なまけ者の畑』は、日本には存在しない。」

飢饉と間引き

江戸時代の貧しさを物語る証拠としてよく飢饉や間引きの問題が出される。もっとも悲惨だったといわれる天明飢饉では、津軽で二〇万人もの餓死者が出たという。

当時の農業技術では天災に対応することは難しかった。

それはヨーロッパでも同じだ。一七世紀末のフィンランドでは人口の三分の一が餓死し、一七六九年のフランスでは約一〇〇万人が餓死したという。また一八四五年のアイルランドのじゃがいも飢饉では、餓死と国外移民で八〇〇万の人口が四〇〇万人に半減している。

日本に間引きがあれば、ヨーロッパでは捨て子があつた。一八世紀中期のフランスでは貧民層の子供の四分の一は捨てられ、孤児院に収容されても栄養不足や病気で八〇〜九〇％は死んでしまったという。貧しい階層の子供ばかりではない。同じ頃、パリで生れた子供の九〇％以上は「田舎の乳



19世紀パリ。兼児院の様子。（「タブロー・ド・パリ」）

母」に里子に出された。その乳母のもとでの里子の死亡率は七〇〜九〇％にも及んでいる。

一七五〇年、ロンドンの諸貧民収容所に収容された子供は二、三三九人だが、五年後に生存していた子供はわずか一六八人にすぎなかった。

捨て子も里子も一種の殺人行為に近かった。日本の間引きもヨーロッパの捨て子も、時代的制約の中で行われた産児制限・家族計画ではなかったか。

技術と文化

トロイの遺跡を発掘したシュリーマンが一八六五年に來日してこう述べた。

「もし文明という言葉が物質文明を指すなら、日本人はきわめて文明化されている。なぜなら、日本人は工芸品において蒸気機関を使わずに達することのできる最高の完成度に達しているから。」

オールコックも同様「日本の文明は高度の物質文明であり、すべての産業技術は蒸気力や機械の助けなしに到達することの出来る限りの完成度を見せている」としている。

技術だけではなく、文化の高さは西洋人共通の評価であった。とくに庶民階級の識字率や教育水準の高さは世界最高とみなされていた。そもそも市中の高札、字看板、かわら版、おみくじなどは、一般庶民の識字力を前提にしなければ成り立たない。

一九世紀初期の英国議会議事録によると、イングランドでは全人口の一四人に一人しか学校教育を受けていない。

同時代の江戸の小娘は『浮世風呂』で友達にこうこぼしている。

「朝起きると手習のお師匠さんへ行き、それから三味線のお師匠さんの所へ朝稽古に行き、うちへ帰って朝飯を食べて、踊りの稽古から手習へ廻って、お八ッに帰って湯へ行つてくるとすぐ三味線や踊りのおさらい。そのうち少しばかり遊んで日が暮れると、また琴のおさらいさ。さっぱり遊ぶ隙がないから嫌で嫌で」

大人たちも階級を越えて俳諧、狂歌などに熱中し、長唄、三味線などの稽古ごとを楽しんでた。

英国の植物学者フォーチェンは、日本では下層階級までみな花好きであることに驚いた。

「もし花を愛することが文化生活の高さを証明するものとすれば、日本の下層の人々はイギリスの同じ階級のものたちよりずっと優っている。」

江戸は当時、世界でもっとも高度な園芸文化をつくり出していた。

平和な社会と庶民生活

世界史で平和といえは「ローマの平和 PAX Romana」である。古代ローマが地中海世界を統一し、文明世界にはじめて長期に安定した平和を実現したが、その期間は一〇〇年である。だが、江戸時代の日本は実に三〇〇年近くの間、隣国とも国内でも戦争を経験していない。この「徳川の平和 PAX Tokugawa」は世界史の奇跡といわれている。

ヨーロッパで戦争がなかったのは一六世

紀で一〇年たらず、一七世紀ではわずか四年。宗教戦争、王位継承戦争、植民地争奪戦争など欧米列強は戦争に明け暮れていた。植民地や奴隷制、国内の重税で収奪した

富の大部分は宮殿建設や戦費として浪費された。一七世紀中期の英国では歳出の実に九〇%、ルイ一四世は七五%、ピョートル大帝は八五%を軍事費に用いたといわれる。



右：「稲干す」 左：「稲刈上の日祝」 無事に米が収穫でき、喜びに満ちた秋の農村風景。（『農業図會』）

税金は重かった。ルイ一四世の対英戦争の頃には重税で国民の一〇分の一が乞食になったという。人頭税、十分の一税、軍役税などの直接税のほか、内国関税やいろいろな消費税が課せられていた。

英国では塩税のため貧民たちはベーコンを作る塩さえ買えなかったといい、一六七〇年頃のアムステルダムの居酒屋では、一皿の煮魚とソースに三〇種類もの税が課せられていたという。

一八世紀後期に来日したスウェーデン人ツンベルクは日欧の状況を次のように対比している。

「ヨーロッパの農民と比べるとずっと課税は低い。日本の農民の主人は領主だけで、他の者はいない。ヨーロッパではいろいろな税が徴収される。まず国王、それから貴族、僧侶の三者から搾取される。また徴税役人がむやみに威張る。日本の農民はそういった者に苦しめられることもない。」

重税だといわれていた年貢も、江戸後期ではせいぜい二公八民以下になっていたと最近の研究は報じている。

江戸時代については、建前と実態とのずれがきわめて大きい。実例をあげよう。

私の住んでいる東京都分寺市に一八四一年（天保一二年）の村人たちの旅行記が残されている。その頃の国分寺村は戸数七〇軒、人口三〇〇人ほどの小村だったが、そこから一九人の村人が二ヵ月間の旅に出かけている。その旅程をみると、往きは東海道から伊勢にむかい、伊勢神宮参詣をすませると京、大坂を見物、さらに四国に渡って金比羅詣りをし、帰途は中山道をたどって帰村している。村の三、四軒に一人の

割りで男たちが二ヶ月間も旅行に出かけるなど今日でもあまり考えられないのではなか。他村の記録を見ても二ヶ月程度の旅は珍しくもなく、なかには五人で半年もかけて長崎見物に出かけた例もある。

国分寺には今も

「月花の遊びにゆかいざらば」

という江戸末期の俳人宝雪庵可尊の辞世碑が残っている。ずいぶん優雅な句であるが、彼は国分寺恋ヶ窪村の農民である。それも石高三石四斗、村内五五軒中、三三番目の貧農で馬士として働いていた。彼には弟子が三千人いたがそのほとんどは周辺の農民たちで、当時の人口から考えれば富農ばかりでなく小農の人々まで含まれていたに違いない。俳句を学び楽しむほどの知的レベルをもった農民たちが周辺にこれほど大勢いたことは驚くべきことである。

しかも当時の国分寺はほとんど水田もなく、生産力の低い「下畑」「下々畑」ばかりの村で、『江戸名所図會』には炭焼の図が描かれているように、薪炭を江戸に運んで暮らしていた。その上、尾張藩の御鷹場に組みこまれ、甲州街道府中宿の助郷にもかり出される負担の多い村で、古文書には必ず「困窮村」と記されている。

しかし村人たちの大旅行や俳句づくりの

様子を見ていると、けつして困窮村で重税圧制にあえいでいた貧しい農民の姿は浮かびあがってこない。むしろ建前はともかくとして、本当はかなり余裕のある生活をしていただのではないか。そう考えないと話の辻褄があわないのである。

都市衛生環境の相違

当時の欧米都市といえば「貧困」「治安」とならないで「衛生」が最大の課題であった。外見は壮大で華やかな欧米の都市は、いづれも汚物と悪臭に満ち、絶えず伝染病の脅威にさらされていた。ゴミ、汚物、汚水、



W・フォーガスが描いた18世紀のロンドン。2階から尿尿を捨てている。(『週刊グレート・アーティスト』)

何でも道路に投げ捨てる習慣の中で、その回収が不完全であれば惨状は明らかである。「ロンドン

悪臭ふんぷんたる都市で人々は極貧のうちに死ぬかゴミ溜の中で生きるかどちらかしかない。」(アーサー・ヤング)

そうした国々から来日した欧米人たちは一様に日本の都市の美しき、清潔さに目を見張った。「街路はきわめて清潔で、汚物が積み重ねられて通行を妨げられるようなことはない。これは世界の多くの都市とはまったく対照的だ。」(オールコック)

彼等は江戸で自分の家の前の道路を一日に二度も三度も掃除しているのを見て、ヨーロッパでは決して見られない光景だと驚いた。

日本の都市では人尿尿をはじめ、生ゴミ、ヌカ、灰などあらゆる有機廃棄物が貴重な肥料として売買され、すべて農地に還元されて高い農業生産性を支えていた。そのことが都市の清潔さを保ち、衛生を守っていた要因である。

欧米では都市の廃棄物はほとんど邪魔物であった。パリでもロンドンでも、あらゆる汚物、汚水は下水に流され、最終的にはセーヌ川、テムズ川に流れこんだ。そしてその川が飲料水にも用いられて伝染病の原因となった。



19世紀初頭のパリ。公共給水泉から生活用水を汲む水売人たち。(『タブロー・ド・パリ』)

西洋ではロンドンだけで、パリではナポレオン時代、ニューヨークでは一八四二年まで上水道はなかった。

上水道といってもロンドンでは週に三日、それも一日七時間ほどしか給水されなかった。

それに対し江戸の上水道は神田上水、玉川上水をはじめ本所、青山、三田、千川の各上水を合わせて配水管総延長一五〇キロメートルにも達し、江戸人口の六〇%に常時上水を供給していた。「水道の水で産湯を使った」というのが江戸っ子の自慢であった。

江戸で鮫、刺身、膾など新鮮な素材の味をそのまま活かす料理がもてはやされたのは、川も海も汚染されず清潔な魚貝がとれ、それが運搬、流通、料理から食卓に供せられるまで清潔な状態を保ちえた都市衛生管理の優秀さにおおっている。これは当時の世界では奇跡的なことであった。

以上さまざまな角度から江戸時代の日本と西洋を眺めてきた。「進んだ豊かな西洋、遅れた貧しい日本」といったこれまでの先入観の誤解を解きたかったのである。

江戸時代は、当時の西洋列強に優るとも劣らない高度で豊かなもう一つの文明社会であった。

江戸の食文化も、こうした前提の上で語られるべきではないだろうか。

資料提供

- ◆「江戸小紋」東京都染色工業協同組合
- ◆「江戸古地図・嘉永四年(一八五一年)」古地図史料出版
